

# Newsletter

No. 11

1. インタビュー・研究室探訪 7  
「インド社会を見つけて—生活者の視点をとらえるために—」
4. CIAS 共同研究ワークショップ  
「情報をつなぐ、世界をつかむ—地域情報学で変わる地域研究—」 報告
5. 2012 年度地域研共同利用・共同研究新規課題
7. 地域研究アーカイブズ出版記念会報告
8. 新任国外研究員紹介／地域研究コンソーシアム (JCAS) 2012 年度の活動
9. 地域研データベース紹介 第3回 トルキスタン集成／地域研における科研活動紹介
11. 自著を語る  
『地域情報マッピングからよむ東南アジア—陸域・海域アジアを越えて地域全体像を解明する研究モデル—』  
『中国・ミャンマー国境地域の仏教実践—徳宏タイ族の上座仏教と地域社会—』
12. 旅紀行  
「地中海マルタの“ひと”と猫」
13. 出版物の紹介
14. 地域研の今後の企画／谷川助教紹介
15. 地域研の動き／The Last Photograph



Uzbekistan Photo by C.Obina

CIAS

Center for Integrated Area Studies, Kyoto University

# インド社会を見つづけて —生活者の視点をとらえるために—

話し手・押川 文子（地域研教授）× 聞き手・池田 有日子（地域研研究員）

「研究室探訪」では、地域研究をめぐる議論を豊かにすることを期待して、さまざまな方にお話しをうかがいます。第7回は、歴史研究を出発点に、インドというフィールドから多様なメッセージや研究成果を発信されている押川文子教授（地域研）です。

●おしかわ・ふみこ お茶の水女子大学修士課程（歴史学）修了。アジア経済研究所職員を経て、1995年より民博。2006年4月から現職。主なテーマは、インド近代社会史・南アジア地域研究。近年発表の成果は、「インド都市中間層における「主婦」と家事」落合恵美子・赤枝香奈子『アジア女性と親密性の労働』京都大学学術出版会、pp.81-110、2012年など。

**池田** ● インド研究をはじめたきっかけを教えてください。

**押川** ● 気が付いたらいつの間にかはじめていました。高校時代に非常勤で世界史の授業をしてくださった広大院生の方の近現代史、とくに植民地からナショナリズム、アジアの抵抗運動といった授業が面白かったことや、インドにも興味をもっていたこと、そして当時のベトナム戦争の先が見えない状況などが影響したかもしれません。

**池田** ● 具体的にはなにが魅力だったのですか？

**押川** ● 反抗する人たちに興味がありました。私は小生意気な反抗的な女の子だったんですよ。最初に惹かれたのはネルーでした。近代主義的なアプローチが一番分かりやすかったし、獄中で書いた自伝や『インドの発見』なども翻訳されて一般的にもよく読まれていました。当時の日本の少し左派の知識人は、日本の戦後民主主義のなかで問われてきた問題をインドに投影して考えていたんです。後から思えば、もうこの時期、ネルーが夢想した社会主義型国家の建設は破たんしていたのですが、地方都市の高校生にとってインドはまだ社会運動や民族運動の場に見えた、ということですね。研究者にとって対象地域に遭遇する時期は決定的な意味をもっていて、インドの場合、私よりも前の世代はナショナリズムや社会主義といったイデオロギーから入った方が多いし、80年代頃からインド研究を始めた研究者は、むしろその否定からスタートしているように見えます。私の世代は、ちょうど中途半端な時期ですね。

**池田** ● 大学に入られたのは1969年ですね。

**押川** ● そう、大学闘争も頂点を過ぎていた時期でした。ただ、まだ余韻は残っていて、なんとなく落ち着かない、明るくない時代でしたね。お茶の水女子大に入学したのですが、先生と話をして他の大学のインド史の授業を聴講して単位をもらえたような、おおらかな時代でした。とても幸



最近、女性たちのおしゃべりの楽しさがようやくわかってきた。デリー北部の移民の多い地域で。(2012年8月)

運だったと思うのは、当時の日本のインド史やインド地域研究の先達たちは、あまり格式や権威にこだわらないで自由に他大学の学生も受け入れる雰囲気があったことですね。本郷の学士会館で開かれていた土地制度史の研究会は、東京の第一線のインド史研究者が集まる場でしたが、まったく基礎知識のない学部学生にも「聞きたかったらいいよ」とおっしゃってくれるような開かれた雰囲気をもっていました。毎年7月に研究合宿があって、教授から学部学生まで2泊3日、同じ宿で過ごすという機会もありました。これは今でも継続しています。今よりもみなさんずっと時間があって、参加率も高かったのです。こうしたオープンな雰囲気は、大切だと思います。

**池田** ● 大学では東洋史専攻だったのですね。

**押川** ● はい。でも、インド史が面白いと初めて思ったのは卒論で、19世紀半ばにおきたサンタルと呼ばれていた少数民族の武装蜂起に出会ってからです。サンタルは山地周辺地域で農業で暮らしていた少数民族ですが、平地の開墾が進んで徐々に土地を奪われたり商品経済が入ってきて借金に苦しむといった状況が起きた。鉄道敷設や開墾労働者、アッサムの茶園労働者、さらにもう少し時代が下ると炭鉱労働者といった植民地経済に直結する底辺労働力として従来のコミュニティの外に出る人々も増えました。激しい社会経済変動を経験したのです。19世紀後半には、こうした少数民族の蜂起がたくさんあり、最初は直接的に苦しめられていた金貸しや地主、つまり平地のヒンドゥーを



北部インド・ビハール州の地方都市の町はずれ。村へ帰る人待つ乗合リキシャ。銀行ATMも生活の一部になりつつあるようだ。(2011年1月)



北部インド・ビハール州の農村部。女子就学率も徐々に向上している。真面目な女の子は成績もよいとか。(2011年1月)

ターゲットにしたのですが、結局、鎮圧にやってくるイギリスの警察や軍と対峙することになった。サンタルの反乱のなかでも、大きなよく知られた蜂起でした。50年代から60年代にかけてのインドのインド近代史研究は民族主義がとても強い時期でしたから、こうした反乱は「初期のインド民族独立闘争」として描かれたり、また人類学の分野では「千年王国論」として位置づけられたりしていました。でも、どちらもじっくりこなかった。私の卒論は周辺の資料や二次資料を再構成したにすぎないのですが、サンタルの反乱はもっと複雑ないろいろな要素が絡み合った反乱だったのではないかと問いなおしました。蜂起と呼ばれた動きのなかにも、神のお告げを受けたという若い兄弟を先頭に山地で闘おうとする動きと並行して、当時の権力の中心地カルカッタ（現コルカタ）に陳情に行こうとする動きもあった。治安維持の必要に迫られたイギリス側は少数民族に対して特別行政区を設けて「狡猾なヒンドゥー」から守る、というパターンリスティックな政策に転換するのですが、このことが少数民族の「伝統」の固定化と、労働力としての流出を同時にもたらすことになりました。このように多様な要素が不平等に絡む社会の近代化の複雑なプロセスを想像できるような気がして、それ以来、インドに「はまって」しまいました。

**池田** ● 押川さんの原点は歴史研究なのですね。

**押川** ● あまり自覚的ではないのですが、なにか考えるとき無意識に少し長いタイムスパンをとってその中における変化が気になる、という意味ではそうかもしれませんね。例えば、独立インドに直結する制度の枠組みやそれを支えるアクターが出そろった時期として1930年代、下層や地方が力をつけ発言し始める1970年代、そして変化が加速している2000年前後、という3つの時期がいつも気になります。

**池田** ● 社会史なのでしょう？

**押川** ● 社会史というほど明確ではないですね。帰国して、本当にラッキーなことにアジア経済研究所に拾ってもらったのですが、しっかりと分野別研究の素養がない私は、経済分析もだめ、政治研究もだめ、国際政治もだめ、というわけがずいぶん悩みました。ずいぶん経ってから、イン

ド社会で人がどのように生きているのかということ、その場で働く多くの要素を関係づけながら説明すること、つまり学術的な研究というよりも良質の現状分析、地域理解が必要なのではないか、と思うようになりました。例えば人が生きる時、生まれも大切だし、地域の経済状態も大きな作用をするし、教育や職業も重要です。だとすると生活者の視点にたつて、その選択や状況に作用する多様な条件を組み合わせて現状を理解する必要があります。状況をずらざらと説明するだけではなく、それぞれの分野別分析のエッセンスを踏まえて結合したり、少し長いタイムスパンの変化を念頭において近未来の方向を考えたりできる研究をしていきたいですね。私の地域研究は、そんなイメージです。

**池田** ● ということは、押川さんにとっての地域研究は一つ分野というよりも、学際的な場ということですか？

**押川** ● はい、そう思いますね。むかし石川滋先生（一橋大学名誉教授）から「地域研究にとって一番大切なことは、学際的な共同研究を可能にする具体的な研究課題を設定できるかどうかです」と伺ったことがありました。「課題設定ですか？」と鈍い反応を示す私に石川先生は「大きすぎても小さすぎてもだめです。きちんと研究できる明確で意義のある課題です」と繰り返し説明してくださいました。先生の指摘をちゃんと理解しているかどうか自信はないのですが、分野を超えて「うん、これは重要だ、私の分野からは、こういった形で分析できる」という具体的な方法が見えるような課題設定が大切だということですね。それは結局のところ、アクチュアルで重要な課題、同時代の多くの人にとって重要な課題を、研究状況によって切り取るということだと思います。

**池田** ● だとすると地域研究者とはどういう人を指すのでしょうか？

**押川** ● 自分のことは棚に上げて理想的にいえば（笑）、何らかのディシプリンを持ちながら他の研究分野の状況もよくわかっていて、「明確で意義のある研究課題」を設定できる人、ということになるのでしょうか。一人の巨人が出てすべての分野を統合する、ということもあるかも知れませんが、基本的には地域研究は有能な編集者のような人がいて、課題に即して分野別研究者が離合集散す

る研究のかたちが一番あっているような気がします。

**池田** ● とはいえ現在の研究状況は、大きな課題設定が必要と言われながら、実態はどんどん細分化されていて、分野別の専門家に評価されないと業績にならない傾向はますます強くなっています。

**押川** ● 本当にそうですね。分野別研究と地域研究を両輪に、というのは言葉のうえでは半ば自明のことなのですが、実際は本当に難しくなっています。

**池田** ● 最後の質問ですが、押川さんにとって面白い課題とは、どんなことですか？

**押川** ● 30代後半に「生活者で行こう」と居直った頃から、自分にとっても切実な課題として感じられることを取り上げよう、と思うようになりました。もちろん地域研究は基本的には自社会以外を対象にする分野ですけど、そこで問われていることが自分にとっても大きな意味をもつか否かは重要なことです。ここ数年若い方々とやっていた教育もその一つです。インドと日本の教育状況は二つの極、といってもよいほど異なりますが、問われている問題は、グローバル化や新自由主義的な競争原理が貫徹するなかで、学びの自由と平等（標準化）、教育における国家と個人（学びはだれのものか）、「能力」とは何か、などなど驚くほど共通しています。インドの事例を考えると、逆の方向から日本を意識せざるを得ないわけですね。

**池田** ● 日本との比較研究を意識するということですか？

**押川** ● ある意味ではそうですね。インドと日本はとても異なる社会ですが、課題設定によってはインドの事例が日本を含む東アジアを、逆に東アジアの事例がインドを照射する有効な鏡になると思っています。その視点の一つが、非西欧の近代化ですね。両社会とも、近代化の過程で西欧というものをなんとか自分の論理のなかに位置づけようとしたのですが、そのときの重要な領域の一つがジェンダーでした。「女性」という存在がナショナリズムの言説のなかで特異な役割を担われることになって、日本や東アジアでみられた「良妻賢母」ときわめてよく似た言説がインドでも形成されます。小山静子さん（京都大学大学院人間環境



夏の日のインタビューはなごやかに進んだ。（左・押川教授、右・池田研究員）

学研究科）の良妻賢母論などを読むと、女性に「与えられた」役割としてだけでなく近代性や女性のイニシアティブという点に気付かされ、インドの良妻賢母論を考えるときにもとてもヒントになります。ほかにも日本の近現代史研究から学ぶことは本当に多いですね。

**池田** ● 今後やってみたいテーマはありますか？

**押川** ● 以前から女性のライフストーリーの聞き書きをしたいと思っていました。インタビューしたいのはちょうど私と同世代、特に独立後に生まれてナショナリズムの時代に少女時代を過ごし、親の決めた結婚をして、子どもを二人もうけ、娘にも高等教育を受けさせてグローバル化の時代に社会に送り出した世代です。彼女たちは一生のうちに、いくつも時代を生きることになった。数年前にパイロット・スタディのような少数の事例の聞き取りをしたのですが、文字通り「橋渡しの世代」だと実感しました。ライフストーリーという方法は、今後インドも含めてアジアで大きな課題となる高齢化や少子化の問題にも有用な基礎的なデータになります。私自身も若いときより、少しは共感をもったインタビューもできるのではないかな（笑）。インドはあまりにも大きくて複雑な社会で、何十年も付き合せていただいていたけど、「よくわかった」という実感は全然わからない。いつも複数の、多くの場合は矛盾する声が聞こえるんですね。さらに私には聞こえない声もたくさんあるし、どれかを選ばない限り見えないこともある。そういうなかで一度、インド社会といった集合的な場ではなく、一人ひとりのお話を聞いてみたいと思うようになりました。もっとも一人にインタビューをしても、結局聞こえる部分のみ聞いてしまう、ということになるのかも知れませんが、幸いインド側にも協力してくださる方もいるので、数年以内にぜひ始めたいです。それからもう一つ、女性雑誌の分析を以前したことはあるのですが、そろそろヒンディー映画についてなにかできないか、とも思っています。これは楽しすぎる課題なので、もう少しとっておきたいところですけどね（笑）。

**池田** ● ありがとうございます。



電線はあっても電気供給は日に数時間というビハール州農村部。でも太陽光パネルとディッシュがあれば、衛生放送を受信できる。（2011年1月）

## 「情報をつなぐ、世界をつかむ —地域情報学で変わる地域研究—」 報告

京都大学地域研究統合情報センター（CIAS）では、情報学の手法を地域研究に援用した地域情報学を構築するために、「地域情報学プロジェクト」を2年前に立ち上げ、CIASのひとつの柱として推進してきた。地域情報学プロジェクトでは、個別の地域研究課題の解決に特化し、目的に応じてカスタマイズが可能な統合型地域研究データベースの構築を進めてきた。これは、従来の汎用的な利用を前提としたデータベースとは異なり、なんらかの研究課題に関する研究者ひとりひとりが蓄積してきた情報に、地域情報学の手法を応用し、さまざまな地域関連情報を付け加え、分析可能とするタイプのデータベースである。研究者が研究目的に応じてその都度構築するデータベースであるといってもよい。統合型地域研究データベースを構築する過程で、CIASではさまざまな課題に直面することになった。たとえば、情報に埋め込まれた文脈依存的な背景情報をいかに抽出するのか、研究と実践の双方にメリットのある情報分析と発信方法をどのように工夫すればよいのか、聞き取りや参与観察の記録といった地域に特化した経験的データを他の地域関連情報とどのように組み合わせる一般化できるのかといった課題である。こうした課題は、情報学の課題であるというよりもむしろ、地域研究の課題でもあった。そこで、地域情報学プロジェクトを推進する過程で見えてきたこうした課題とそれに対する取り組みを議論し、地域研究や情報学を専門とする方々と新たな地域研究の展開を考えるためのワークショップを、2012年4月28日に開催した。ワークショップでの報告は以下のとおりである。

「災害地域情報の多目的利用—研究と社会をつなぐ—（発表：西芳美・CIAS准教授）」

「ポスト社会主義諸国の選挙・政党データベースの「活用」に関する2つの試論（発表：仙石学・西南学院大学法学部教授、小森宏美・早稲田大学教育・総合科学学術院准教授）」

「フィールドノートの利用可能性—経験的データから共有可能データへ—（発表：柳澤雅之・CIAS准教授）」

「寺院マッピング—見えないものを写像する—（発表：林行夫・CIAS教授）」

「トルキスタン集成—現地との協働による希少資料の保存・共有・活用—（発表：帯谷知可・CIAS准教授）」

また、これらの報告の最後に、CIASの山本博之准教授から、地域情報学プロジェクトを進めていることを地域研究の一部として考えるための報告「「地域の知」ネットワークのための工夫」をしていただき、総合討論に入った。

総合討論では、愛知大学文学部の伊東利勝教授、ジェトロ・アジア経済研究所の武内進一主任研究員からそれぞれの学問上の立場からの深いコメントをいただき、その後、フロアからの活発な質問・コメントを受けた。本ワークショップの議論は、地域研究にとっても情報学にとっても刺激的なアイデアや萌芽的な試みに満ちたワークショップだったので、今年度のCIASディスカッションペーパーとして刊行する予定である。

（柳澤 雅之）

# 2012年度地域研共同利用・共同研究新規課題

地域研の推進する共同利用・共同研究拠点としての本年度の課題が決定しました

## 地域研究方法論プロジェクト:

【統括】〈地域〉を測量(はか)る—21世紀の「地域」像

### 1. 新自由主義の浸透と社会への影響に関する地域間比較研究

市場経済移行期のラオス農村金融市場の形成：東北タイ、ベトナム、日本の経験との比較

(研究代表者：大野 昭彦 青山学院大学国際政治経済学部・教授)

ヴィエンチャン特別市の農村部を中心にして1990年代末以降急成長しているラオス農村信用組合に着目し、市場経済の浸透が農村社会に、そして農村社会の特性が市場経済の形成に与える影響という相互作用という観点から、農村社会への新自由主義の浸透を検討する。また、ラオスの特性を浮き上がらせるため、信用組合についての歴史的経験を蓄積している東北タイと日本、さらにベトナムの農村金融制度を比較の対象に据える。

南アジアの教育における新自由主義—私事化・市場化・国際化の地域間比較に向けて

(研究代表者：押川 文子 地域研・教授)

新自由主義的な政策潮流は、南アジアの教育分野においても私立学校や私企業の教育参入、学校選択制の導入といった教育の私事化・市場化をもたらしている。その一方で南アジアでは、市場原理にもとづく競争を制限し、弱者層の教育機会の保証を試みる「インクルーシブ」な教育制度を指向する動きも強い。本ユニットでは、南アジアの新自由主義的な教育の動きとその社会的影響、および新自由主義に拮抗する教育改革や人々の対応を、他地域と比較を視野にいれて解明する。

中東地域における経済自由化政策をめぐる受容と抵抗—比較政治研究—

(研究代表者：末近 浩太 立命館大学国際関係学部・准教授)

エジプトとチュニジアを例とする経済自由化後の大統領辞任という一連の中東政変の動向は、南米における民主化プロセスを彷彿させる。一方、経済自由化に抵抗して社会主義的経済を存続させたシリアは民衆デモを暴力で弾圧し、権威主義体制の維持を図っている。本研究会は経済自由化に対する過去の対応を鑑みて、中東諸国における政治的状況およびそれが社会にもたらした影響について検討し、中東諸国の政治体制変容について理論的かつ個別事例の分析を進めることを課題とする。

中東欧・ロシアにおける新自由主義的政策の理念と実態

(研究代表者：仙石 学 西南学院大学法学部・教授)

中東欧・ロシアにおける新自由主義的政策の展開とその功罪に対するこれまでの比較研究の結果を踏まえ、中東欧・ロシア各国における新自由主義的政策の実施の背景、特に新自由主義的な政策が受け入れられる時に政治リーダーにより共有される理念、および新自由主義的な政策が実施された場合の実際の成果について、中東欧・ロシアの事例を中心として、ラテンアメリカとの比較も視野に入れながらより具体的な分析を試みる。

新自由主義期ラテンアメリカにおける政策的位相の比較研究

(研究代表者：村上 勇介 地域研・准教授)

1980年代からの新自由主義の導入、2000年以降の新自由主義の見直しと左派政権の誕生という政策的変化にもかかわらず、社会支出という観点からすると、1990年代と2000年代には大きな変化は観察されず、むしろ継続性が存在する。本ユニットでは、社会支出の規模を例に、新自由主義期のラテンアメリカにおいて実行された政策の差異を、先行研究とは別の観点から分析し、それが政治変動に与えた影響を検証する。

### 2. 自然と人の相互作用からみた歴史的地域の生成

相関型地域研究による総合的マツタケ (*Tricholoma spp.*) 学の創成

(研究代表者：大石 高典 京都大学アフリカ地域研究資料センター・研究員)

日本におけるマツタケ生産量激減に伴い、東アジアだけではなく北アメリカ、中米メキシコ、地中海沿岸から北アフリカ、北欧スカンジナビア半島にいたる広範な地域でマツタケが採取され、日本へ輸入されるに至っている。本ユニットでは、これら各地域において生起しているマツタケをめぐる諸現象を、1) 生態環境とヒューマン・インパクト、2) 流通の政治経済、3) 人の移動と食文化、の各レベルで把握することにより、地域間を比較しつつ、地域間の相互作用を動的に描き出す。

アブラヤシ農園拡大の政治経済学：東南アジアを超えて

(研究代表者：林田 秀樹 同志社大学人文科学研究所・准教授)

マレーシア、インドネシア資本が中南米、西アフリカにアブラヤシ農園を急拡大させており、アブラヤシは東南アジアを超えてグローバルに栽培される商品作物と化している。コーヒーやバナナなどの商品作物と比較しながら、この急拡大のロジックを検討したい。また、パーム油を含む食用油は人間の食生活の基本でありながら、その流通の歴史や国際機関や国家の政策についての研究は乏しい。本ユニットでは政治経済学的に食用油の流通を分析し、そこにパーム油を位置づけたい。

アフリカにおける人為植生の成立要因と歴史の変遷に関する地域間比較研究

(研究代表者：藤岡 悠一郎 近畿大学農学部・博士研究員 (PD))

人間活動の影響下で成立する人為植生は、生物多様性保全や地域開発、持続的資源利用の観点からその価値が見直されている。本ユニットでは、人為植生の形成要因と歴史の変遷に関する地域横断的な比較検討を行う。そして、アフリカの人為植生の多様性を生み出す、人と自然との多面的な関係性を明らかにし、同時に保全や開発の文脈に必ずしも収斂しえない、人為植生の多様な機能や社会文化的意味を抽出することを目的とする。

アジアの大河流域における地域形成が流域ガバナンスに及ぼす影響

(研究代表者：山口 哲由 愛知大学国際中国学研究センター・研究員)

河川ガバナンスにおいて地域住民は重要なアクターであるが、その存在は社会の一要素として一般化されており、流域内部の地域形成に基づく民族分布や経済状況の不均一性、上流と下流の地域間関係などはあまり考慮されていない。本ユニットでは、中国・東南アジアの大河を取り上げ、流域内部の各所で生じている諸問題を明らかにし、流域ごとの地域の構造とそれが現在の河川ガバナンスにどのような関わりを持つのかを提示する。

### 3. 〈宗教〉からみた地域像

異宗教・異民族間コミュニケーションにおける共生の枠組と地域の複相性に関する比較研究

(研究代表者：王 柳蘭 地域研・日本学術振興会特別研究員 (RPD))

日本においても1990年代以降、多文化共生にもとづく地域形成に強い関心が高まっている。しかし現実には、異質な人間集団、文化体系を包括しようとする共生の枠組みが用意されているわけではない。本研究では、多元的な関係性のなかにおかれた地域を前提に、異宗教・異民族間コミュニケーションにおける共生の枠組みや文化装置、それらを結ぶ行為主体に着眼することを通して、多様で流動的な民族集団によって立ち現れる複相的な地域の在り方、その秩序原理や社会構造を比較する。

## 地域情報学プロジェクト

### 4. 地域情報学の展開

地域表象情報学の試み—写真は地域の何を私たちに語りかけるのか？

(研究代表者：貴志 俊彦 地域研・教授)

写真に表象された地域イメージの語彙化をはかるため、「地域研究」と「歴史学」、「表象研究」、「画像処理研究」をつなぐ新たな研究手法としての「地域表象情報学」の構築を試みる。京都大学人文科学研究所所蔵資料を検証材料とし、撮影者や撮影意図、空間の切り取り方などから、国策会社の「視点」やその特徴、歴史的意義づけを明らかにする。

HGISの展開に関する研究

(研究代表者：関野 樹 総合地球環境学研究所・准教授)

先行研究の成果などを参照しながら、1) HGISのアプローチを地域研究へ適用するために、実際の研究現場で必要な手法やノウハウを整理し提供すること、2) 先行研究で検討された基盤情報の共有についてその実現を試みること、そして3) これらの研究成果や国内外の研究動向を踏まえながら今後のHGISの展開に必要な課題を抽出し、地域情報学の可能性をさらに広げるための足掛かりを作る。

## 地域情報資源共有化プロジェクト

### 5. CIAS 所蔵資料の活用

帝政ロシアの植民地的「知」の中の中央アジア：「トルキスタン集成」データベースの検索機能の高度化を通じて

(研究代表者：帯谷 知可 地域研・准教授)

「トルキスタン集成」(オリジナル 594 巻) データベースに地域情報学の最新の成果を組み込んで検索機能を高度化させ、また中央アジア地域研究者らによるキーワードおよび関連情報の追加によって、帝政ロシアによって構築された中央アジアに関するこの植民地的な「知」の情報群に分け入るための「導き」や「ヒント」、多様な資料間の「連関」などを提示させ、書誌情報検索と資料現物の閲覧に留まらず、利用者がこの植民地的な「知」の世界を縦横に探索できるデータベースへと進化させることをめざす。

「混成アジア映画」に見る世界：一潮流としてのマレーシアを中心に

(研究代表者：篠崎 香織 北九州市立大学外国語学部・准教授)

戦後日本のアジア映画への関心の向け方を辿ることで、日本がアジアに向けてきた関心のありかたを整理。さらに近年日本で多く見られる映画制作の形式を「混成アジア映画」と位置付け、その制作が盛んになりつつあることを映画史とアジア社会史の双方から議論し、今後のアジアにおける日本の位置づけを検討する。これとあわせ、研究者、映画制作業界、情報処理技術の専門家が協力して地域研が所蔵する映画データベースを検証し、映画データベースのあり方を提案する。

島嶼部東南アジアにおける国民国家形成とマレー・ムスリムのネットワーク

(研究代表者：坪井 祐司 東洋文庫・研究員 (客員))

地域研のジャウイの雑誌「『カラム』記事データベース」に関する以下2点の研究を実施する。1) 現在の『カラム』データベースの改良、およびジャウイの講習会開催によるジャウイに関心を持つ研究者のネットワークの深化。2) 国民国家とその国境が形成されるなか、『カラム』に代表されるイスラム主義勢力の思想や活動がどのように変化したかを明らかにすることにより、従来のナショナリスト史観にかわる新しい東南アジア現代史の構築に貢献する。

## 地域研究方法論プロジェクト

### 6. 地域研究方法論

紛争・災害後社会のメディアと記憶

(研究代表者：西 芳実 地域研・准教授)

東ティモール紛争やアチェ紛争のような20年以上にわたる武力紛争や、2004年スマトラ沖地震津波や2006年ジャワ島中部地震のような大規模自然災害に見舞われた経験を持つインドネシアの事例をもとに、社会全体に大きな影響を及ぼした災厄が紛争終結後や復興過程の社会の中でどのように記録され、また記憶されるのかを分析するための研究の基礎的な枠組をつくる。あわせて、人文社会系の地域研究者が自身の専門性を活用して紛争後社会や被災後社会の復興過程にコミットする方法について検討する。

# 地域研究アーカイブズ出版記念会報告

京都大学地域研究統合情報センター（CIAS）では、現地の参与観察や聞き取りから得られた記録、写真・動画等の、地域研究者によるファーストハンドの研究資料を集成し、地域研究の新たな研究資源として共有化し利用可能にするためのシステムを構築中である。その最初の成果として、2012年3月に、京都大学東南アジア研究所で地域研究に携わっていた高谷好一名誉教授の『フィールドノート集成（I～V）』と、同じく山田勇名誉教授の『世界の森 調査記録』が出版された。『フィールドノート集成（I～V）』は、高谷先生が東南アジアを中心に世界中を歩き、ご自身の観察や聞き取り記録であるフィールドノートをとりまとめたものであり、地形や植生、農業技術、土地利用等の記述とスケッチ、写真等で構成されている。『世界の森 調査記録』は山田先生がご自身で撮影された世界中の森に関する写真を中心に、現地の状況などのキャプションを加え整理したものである。いずれも長期にわたるフィールドワークのとりまとめの第一段階として、きわめて貴重な成果であると考えられる。

これらの資料集成の出版を記念し、今後の共有化と利用に向けたアイデアを議論する場として、2012年5月26日、京都大学稲盛財団記念館で「地域研究アーカイブズ出版記念会」を開催した。高谷先生と山田先生の人徳のおかげで、各界のさまざまな年齢層の方にご参加いただき、大変盛況

な会となった。また、本記念会を開催するにあたり、実に127名の方に発起人になっていただき、さまざまな形で会の開催にサポートをいただいた。この場をお借りして、お礼申し上げます。

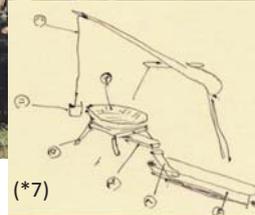
地域研究アーカイブズ出版記念会では、山田先生から、現場を歩くことの重要性和同時に、世界を広く見ることの意義が語られた。後日、山田先生にお伺いしたところによると、なんと、極地を除くすべての大陸を走破されたということであった。次いで、高谷先生からは、ご自身のフィールドでの経験に加えて、会全体の趣旨を非常に明瞭に述べていただいた。時折、名指しで地域研究アーカイブズに協力を求めているなど、CIASの活動を進めるにあたって、大変ありがたいことであった。その後、柳澤が、CIASで進めようとしている地域研究アーカイブズ構想を提示し、フロアの方々と、さまざまな意見交換の場を設けることができた。

京都大学でも、博物館をはじめとして、研究者自身が収集した資料に対するアーカイブズ化の動きがはじまっている。これまでの研究の蓄積であるほう大なデータに多くの方がアクセス出来、研究資源を共有し、未来へ活かす道を開くため、少しずつカタチにしていこうとする動きがはじまっており、CIASでは、特に地域研究の立場から、その実現に向けて動き出している。（柳澤 雅之）

## 地域研究アーカイブズの一例

フィールドワークで得られた観察記録や現場でのスケッチ、写真・動画、聞き取り記録などは、現地を知る貴重な一次資料

B) Kantor Camat の近くのサゴ工場  
 1. 12 か所の洗い場とその前に12 か所のserampin ( 粉碎サゴ) 用小屋。別にpiring( 粉碎器) 小屋1つ。  
 2. サゴは次の方法で処理する。  
 a) Tual は筏にして工場の前まで曳いてくる。b) Tual は5つか6つに割られる。これをdelisという。これをpiring( またはparut) で擦り下ろす。擦り下ろした粉状の物をserampin という。これを前の小屋に入れる。小屋はサゴヤシの葉柄で出来ている。



『フィールドノート集成Ⅱ（東南アジア島嶼部）』高谷好一、1984年12月6日の記述より抜粋（スマトラ）

(\*7)

出所：2012年5月26日 地域研究アーカイブズ出版記念会での発表スライド（柳澤）から

**Downshifting and Sustainability in Comparative Perspective**  
**Dr. Jeanine Schreurs**

Maastricht University, Netherlands (任用期間：2012年5月1日～7月31日)

The main questions of my research work in Japan are: how do the economic and ecological crisis effect the life of the Japanese? Are new opportunities for sustainable living explored and developed? Results of this study will be compared with results of similar studies in Europe and the USA. The second project I am working on, is a qualitative study amongst Fukushima refugees. With colleagues of Chuo University and Hosei University we make a reconstruction of events from the moment people became refugees - by means of storytelling. In particular we focus on the transformation processes in people's lives.

My blog about my research work is to be found at <http://doyoukyoto.blogspot.com>



**Russian-Japanese Cross-National Marriage: A Step To The Global Cultural Environment**

**Dr. Larisa Usmahova**

Kazan Federal University, Russia (任用期間：2012年5月1日～7月31日)

In 2011 there were 7,566 Russians in Japan. Half of the Russian community in Japan is represented by Russian wives of Japanese men, estimated between 3,000 and 5,000 women. Three reasons made them come to Japan: unstable political and economic situation and a huge female population in Russia (53.5%); and depopulation in Japan, which creates a "lack of brides" problem. Interviews were conducted in Kyoto, Tokyo and Shimane prefecture. 25 questionnaires were obtained via internet (*Russian women community in Kansai* and *Facebook's Russian community in Japan*). The results have shown that Russian wives, who have lived more than 5 years in Japan, don't want to be the exclusive "foreigners" as when they were just coming to Japan. Russian image in Japan has a very female face.

地域研究コンソーシアム (JCAS) 2012 年度の活動

地域研究コンソーシアム (JCAS) は設立から9年目を迎え、4月から第5期運営委員会として新たなメンバー構成となりました。これから2年間、宮原暁運営委員長 (大阪大学グローバルコラボレーションセンター) のもとで活動が展開されます。年次集会、研究企画、次世代支援、研究交流促進、広報、和文雑誌、情報資源、社会連携、および地域研究方法論の各部会がそれぞれ具体的な活動のイニシアティブを取っていきます。2012年8月末現在の加盟組織数は95となっています。

第2回地域研究コンソーシアム賞の応募が5月7日に締め切られました。研究作品賞、登竜賞、社会連携賞の3賞について審査が行われました。

今年度の年次集会は11月2日 (金)～3日 (土) の2日間、北海道大学で開催されます。総会においてJCAS賞授賞式が行わ

れる予定です。同時に開催される一般公開シンポジウムの企画も進んでいるところです。

JCASでは次世代ワークショップ、共同企画研究、共同企画講義、学会連携、オンデマンドセミナー、社会連携プロジェクトなどの公募プロジェクトを推進しています。一部については春募集の締め切りが過ぎましたが、まだ応募可能なものもありますので、ぜひJCASのホームページをご覧ください。 <http://www.jcas.jp/>

<http://www.jcas.jp/>

また、JCASのメールマガジンJCAS Newsにもぜひご登録ください。(配信申し込みは次のアドレスに本文なしのメールをお送りください。 [Jcasnews-join@jcas.jp](mailto:Jcasnews-join@jcas.jp))

(帯谷 知可)



JCASのホームページ <http://www.jcas.jp/>

# DATA BASE

## 地域研データベース紹介 第3回

地域研ウェブサイトにて公開されているデータベースを順次紹介します。

# トルキスタン集成

Turkestanii sbornik

ロシア帝国の中央アジア征服の結果タシュケント（現在のウズベキスタンの首都）にトルキスタン総督府が設置された後、初代総督カウフマン K. P. fon-Kaufman の命により、19 世紀後半から 20 世紀初頭にかけて収集された中央アジアに関する文献資料コレクション。全 594 巻および 4 種の索引から成る。中央アジアをロシア人がよりよく知るための百科事典として構想され、帝都サンクトペテルブルグで司書メジョフ V. I. Mezhev によって 1868 年から編纂が開始された。1907 年からはタシュケントに拠点を移し、1917 年のロシア革命前夜までこの事業は続けられた。このコレクションはロシア革命という一大変革を経ても失われることなく、ソヴィエト体制下でもその索引を作成する作業が行われた。

『トルキスタン集成』は、形態としては、ロシア領トルキスタンのみならず、ロシア帝国の保護国であったブハラとヒヴァ、さらに隣接する清朝支配下の東トルキスタン、アフガニスタンやペルシアなどに関して、ロシア語を中心に欧米諸語による単行本、雑誌論文、新聞記事など当時の文献資料を網羅的に収集し、共通の表紙をつけて製本し直したものである。その内容は、当時の学問の最新成果、旅行や学術調査・軍事遠征の報告、現地情勢、時事問題に関する議論、地図、統計などきわめて多岐にわたる。

コレクションとしては世界に 1 セットしか存在せず、タシュケントにあるウズベキスタン共和国ナヴァーイー記念国立図書館希少本室に保存されている。京都大学地域研究統合情報センターはこのコレクションのデジタル複製版(CD122 枚)を所蔵し、データベース化を進めている。

(帯谷 知可)



## 地域研における科研活動紹介

### 博物館建築がポピュラー文化受容に果たす空間的機能の解明とその設計還元に向けた研究

2012～2014年度 挑戦的萌芽研究 代表者 谷川竜一

本研究では日本、フランス及び韓国のマンガ・ミュージアムを対象に、各建築内の展示空間がどのように構成され、来館者がどのように展示を見ているかという、建築空間と来館者の観覧体験の相互関係の分析を行う。博物館建築は、歴史的には西洋で完成し、見習うべき手本=確立された建築類型としてアジアに入って来た。そこに、アジア（主に日本）で洗練された大衆文化かつメディア・アートでもあるマンガが展示されるとき、博物館が建築空間としていかに対応し（時に齟齬をともなって）、いかにそれぞれの場で成立しているのかを明らかにしたい。「クールジャパン」などの威勢のよい言葉とは裏腹に、マンガとの向き合い方を空間的に議論した研究は少ない。ここでは、建築学、博物館学、社会学、民俗学の領域から総合的に考察することで、建築単体の議論にとどまらず、マンガを用いた地域振興やマンガ文化そのものへの貢献へつなげることを目的としている。



宝塚にある手塚治虫記念館 外観、エントランスともに漫画『リボンの騎士』を想起させるデザインとなっている。

## HOW CAN LOCAL COMMUNITIES CONTRIBUTE TO THE SUCCESS OF INTERNATIONAL ENVIRONMENTAL REGIMES?

2012 ~ 2014 Grant-in-Aid for Scientific Research (B) Representative Wil de Jong

This question is the title of a recently approved JSPS type B project, a collaboration between CIAS, CSEAS, ASAFAS and Nagoya City University. It points at two important challenges that the world community now faces. One, human society appears to have reached, or possibly already surpassed, global sustainability limits. The use of natural resource uses has exceeded natural level of replenishment. Together, we emit more carbon dioxide, and other global warming causing gasses into the atmosphere, than natural sinks can absorb. This is causing the world to heat up, with all its negative consequences. Tropical deforestation continues in Asia, Africa and South America; fish stocks of the world oceans are still overharvested everywhere, with imminent risks that species like tuna, whales and dolphins might decline to below natural recovery capacity; the big apes populations, the orangutans from Southeast Asia, and gorillas and chimpanzees from tropical Africa are still declining because the poachers can easily sell their meat that remains in high demand, or their territories are located in areas marred by civil wars.

The world community, through its various international organizations, has paid heed to these problems and started multiple initiatives to address them. Generally, these initiatives are called international environmental regimes (IERs). Well known is the United Nations Framework Climate Change Convention (UNFCCC), but also the Convention on Biological Diversity (CBD), which aims to reduce the loss of species like the big apes, or any other threatened biological species, but also valuable ecosystems. Others are the Convention for the International Trade of Endangered Species (CITES) and the International Conventions for the Regulation of Whaling (IRWC). These conventions are approved by the UN General Assembly and signed by member countries and thus have the status of international law. An IER usually includes an internationally agreement like a convention, but also a secretariat which organizes frequent meetings of the signing parties to monitor implementation, as well as the political and administrative procedures around such an agreement. Signing countries commit themselves to enact



Monkey (The Convention on Biological Diversity preserves wildlife but also constrains local dwellers in their livelihoods.)



Flooded house (Local communities will bear the brunt of climate change which may increase rain patterns and river flooding.)

national legislation after signing an international convention to implement the latter domestically.

The second challenge reflected in the title, is how minimize the negative impacts of the depletion of the world's resources on local communities, but also of IERs. Local communities, especially in tropical regions often depend highly on the exploitation of natural resources. Many local dwellers live of agriculture, and their production will negatively be effected by the consequences of climate change, like increased or greater fluctuating temperatures, increased rains, and more frequent fires. They will also suffer excessively from disappearing forests and declining marine stocks. But not only do communities suffer from declining natural resources, they also suffer from the restraints imposed by IERs that signatory countries are implementing domestically. Countries establish terrestrial and marine conservation areas and exclude local communities to hunt or fish in them, or to collect other non-timber forest and non-fish marine products. Local communities are being expelled from forested regions that are now being subjected to protection for climate change mitigation purposes or because the land is being assigned for biofuel production.

The exact impact of IERs on local communities, however, has yet sparsely been explored. The work hypotheses of the newly started research project is that IERs cause considerable negative impact, but that there is much opportunity to reduce this. The project aims to reveal how a better structured involvement of local communities in the formulation and implementation of IERs will not only reduce negative impacts but also likely increase their success. The project will investigate impacts on local communities of the UNFCCC, CBD, CITES, the UN Forum on Forests (UNFF) and IRWC, in five countries spread out over tropical Asia, Africa and South America. We expect the research will contribute to our understanding of IERs, but also provide meaningful contributions to increase their success, and, most important, improve the conditions of local communities worldwide.

## 自著を語る

地域研のメンバーが自らの編著書を解説。  
執筆・編集の狙いや背景を紹介します。

### 地域情報マッピングからよむ東南アジア

—陸域・海域アジアを越えて地域全体像を解明する研究モデル—

柴山 守 / 著

地域のくごきを地図や時間軸上にマッピングし、地域のく見えないくごきをよむ情報学からの挑戦と研究事例について紹介している。タイ語のコンピュータによる認識・理解は、ヒトとどのように違うかことばのくごき。中世・近世の東南アジアと日本の交易—インターネット技術と同じ階層構造でよむくモノのくごき。雨安居期を過ぎると寺院を移動する僧侶—東北タイのウボンラーチャターニー県コーンナム郡寺院の立地環境と僧侶の移動・遍歴を情報理論でよむくひとのくごき。仏領期ベトナムの首都ハノイの都市形成過程を空間情報学で解明するくまちのくごき。情報学の「眼」から地域の全体像を理解する研究モデルの構築に挑み、地域情報学を考える。

柴山 守 (しばやま まもる)  
地域研究統合情報センター・特任教授  
専門分野：地域情報学



地域研主催のはじめての地域情報学シンポジウム  
「地域研究と情報学」2007年2月開催から

### 中国・ミャンマー国境地域の仏教実践

—徳宏タイ族の上座仏教と地域社会

小島 敬裕 / 著

本書は、中国・ミャンマー国境地域に居住する徳宏タイ族の仏教実践について、地域社会や国家との関わりから記述した民族誌である。東南アジア大陸部を中心とする上座仏教徒社会では、多くの男子が出家経験を持つ。人々は毎朝のように僧侶の托鉢に応じ、功德を積む。しかし筆者が調査を行った雲南省徳宏州では、上座仏教が信仰されていないながら、出家者がきわめて少なく、むしろ在家者が日々の実践において重要な役割を果たしている。在家者が主導する徳宏の実践形態は、出家者を不可欠な存在とみなす従来の上座仏教研究を相対化するものである。

こうした注目すべき特徴が見られるにもかかわらず、徳宏での先行研究が少数にとどまっていたのは、近年まで外国人による定着調査が不可能だったためである。筆者が調査許可を取得するのも容易ではなかったが、最終的に調査が実現したのは、諸先輩方が築いてこられた現地の諸機関との関係によるところが大きい。またそれだけでなく、いくつかの幸運も重なった。こうした僥倖に巡りあうと、見聞きしたことがらは何らかの形で書き残しておかなければならないとの思いを強くする。本書をその一里塚として、今後さらに内容を充実させたモノグラフの出版を目指したい。



本書の「主人公」のひとりである在家の誦経・説法  
専門家ホール

小島 敬裕 (こじま たかひろ)  
地域研究統合情報センター・研究員  
専門分野：上座仏教徒社会研究

## 書籍情報



地域情報マッピングからよむ東南アジア  
—陸域・海域アジアを越えて  
地域全体像を解明する研究モデル—

著者 柴山 守  
出版社 勉誠出版  
発行年月 2012年3月  
ページ数 317 pp.  
価格 (税込) 5,000 円



中国・ミャンマー国境地域の仏教実践  
—徳宏タイ族の上座仏教と地域社会

著者 小島 敬裕  
出版社 風響社  
発行年月 2011年12月  
ページ数 66 pp.  
価格 (税込) 840 円

# 旅紀行

## 地中海マルタの“ひと”と猫

藤原久仁子

ふじわらくにこ…地域研究統合情報センター研究員。専門は文化人類学、宗教学、マルタ・地中海地域研究。

マルタは淡路島の半分ほどの小さな島国である。アラビア語方言（マルタ語）を話し、文化的にはイタリアに近くカトリック教徒が人口の98%を占め、イエスをアッラーやムレイ・ジェスと表現する。イスラームとキリスト教の交差するところを見たいというのが、マルタをフィールドワーク先に選んだ理由のひとつであった。しかし、実際に調査を始めてみると、小さな

島の各村にマルタ語方言が存在し、同じ言葉でも北部と南部では発音の仕方が異なり、また上流階級を自認する人びとが選ぶ語彙とそうでない人びとの語彙に差があること、マリア信仰者かヨセフ信仰者か、国民党支持者か労働党支持者かで巡礼路が異なること等を知り、むしろカトリック教徒間の地域差や集団形成の背後の論理を知りたいと思うようになった。

そんなマルタでの調査中、たくさんの人に出会い、多くの猫と顔見知り(?)になった。マルタには人口の40万人をはるかに上回る数の猫が住んでいるという（マルタ猫協会）。日本でも『マルター幸せな猫の島』（2002年）という写真集が発売され、「マルタの猫—地中海・人とネコの不思議な物語」というドキュメンタリーが放映されたため（NHKで2003年3月以降複数回放送）、猫の島というイメージが出来つつあるかもしれない。



被昇天祭の聖マリア祭の様子（アーシャ村）

猫が増えるのは餌をやる人がいるからだが、ノラ猫に餌をやるという行為はカトリックの慈愛の精神に基づくだけでなく、実は邪視除けの意味合いを持っている。島北部にあるセント・ポールズ・ベイの聖フランシスコ修道院では、邪視を含むネガティブな感情からの解放を目的とする集会が定期的に開かれている。参加者の多くはカトリック・カリスマ刷新運動の信者で

占められるが、彼らは別の機会にはプロテスタントの福音派とともに「ボーン・アゲイン」を名乗り、邪視除けとは無関係の共同集会を組織したりもしている。こうしたイレギュラーな集団形成の論理を追うと、マルタを超えた文脈、たとえばカトリックのエキュメニズムの思想や、アメリカやオーストラリアで福音派に改宗したマルタ人帰還民の国を跨いだネットワークとの関わりに気づかされる。

トランスナショナル化が進み、複数の国を往還する流動的な人びとで構成される場のあり方が問われるなか、イギリス連邦、EU、地中海連合といった国家や宗教の枠を超えた集合体に属するマルタはいかなる変化の道を歩むのか。ソマリアやエリトリアからの難民対策、EU加盟国への再移住計画の問題や課題を切り開く端緒はどこに見出し得るか。マルタ騎士団という国土なき主権実体 sovereign entity と国家の実質的な違いは何か。こうした点は地中海とその「周辺」地域を考える上でも、国家概念の変遷と実体を吟味する上でも重要な論点となるだろう。マルタは地中海に浮かぶ小さな島国だが、そこから見えてくる世界は広大である。地域再編や集団編成の論理について、マルタで暮らす猫たちの視線を浴びながら、これからも調査を続けていくことにしたい。



聖ペテロ祭で盛り上がる若者たち（ビルゼブジャ村）

## 出版物の紹介

地域研が最近刊行した出版物と、地域研スタッフが執筆・編集した出版物を紹介します。



### 美國在亞洲的文化冷戰

貴志俊彦・土屋由香・林鴻亦 編

台北：稻鄉出版社

2012年6月刊 291頁 320円

2010年5月、台湾・輔仁大学で開催した「文化冷戦の時代—美国的資訊戰略與亞洲的傳媒發展」国際学術論壇での成果をもとに、「文化冷戦の時代—アメリカとアジア」（国際書院、2009年）を改訂。



文化冷戦とアジア—脱中心化する冷戦研究

### 문화냉전과 아시아: 냉전 연구를 탈중심화하기

기시 도시히코 (貴志俊彦) · 쓰치야 유카 (土屋由香) 編, 김려실 (金麗實) 訳

ソウル: 소명출판

2012年6月刊 336頁 25,000원

『文化冷戦の時代—アメリカとアジア』（国際書院、2009年）

の韓国版。戦後、米国が日本、韓国、台湾、フィリピン、ラオスで実施した広報宣伝政策と、当該地域での影響の実態の両面から、米国とアジアの新たな関係を明らかにする。



アンデス諸国の政治経済変動

### Dinámica político-económica de los países andinos

Yusuke MURAKAMI (村上勇介 著)

Instituto de Estudios Peruanos

2012年3月刊 387頁 S/45.00

この20年余りのあいだで、ラテンアメリカのなかで最も不安定化したアンデス諸国（ボリビア、コロンビア、エクアドル、ペルー、ベネズエラ）の政治経済を比較の観点から分析し、今後の課題と展望を提起した論文集。



フジモリ時代のペルー—制度化しない政治、救世主を求める人々—  
**PERU EN LA ERA DEL CHINO. LA POLITICA NO INSTITUCIONALIZADA Y EL PUEBLO EN BUSCA DE UN SALVADOR. SEGUNDA EDICION**

Yusuke MURAKAMI (村上勇介 著)

Instituto de Estudios Peruanos

2012年3月刊 698頁 S/60.00

歴史的、構造的な要因と延べ150人ほどに対しおこなったインタビューをふまえ、アルベルト・フジモリが政権にあった1990年代ペルーの政治過程を内側から動態的に分析した。新たな序文を加えた、2007年初版の第2版。



### 地球圏・生命圏の潜在力—熱帯地域社会の生存基盤

柳澤雅之・河野泰之・甲山 治・神崎護 編

京都大学学術出版会

2012年3月刊 336頁 3,990円

生物多様性や生態系の持続性に鑑み、人類の生存基盤をどう構築すべきか。新しい社会システムの指針を提示する。



### 雑誌に見る東日本大震災—震災はいかにして国民的災害になったか

山本博之 監修

地域研究統合情報センター

2012年3月刊 127頁

雑誌における震災の扱いの時間的変化からは、日本において震災がどのように受け止められ、捉えられようとしてきたかが読み取れる。本書は2011年3月11日以降に日本国内で刊行された雑誌のうち、表紙または目次に震災に関連する記事が掲載されたもの591点を網羅的に収集し、掲載された震災関連記事3704点のタイトルを雑誌ごとにまとめた貴重な目録である。



### QALAM No.12-17 1951.7 ~ 1951.12

山本博之 監修

地域研究統合情報センター

2012年4月刊 558頁

1950年から1969年にかけてシンガポールで発行されたマレー語ジャウィ雑誌『カラム』のうち、第12号から17号までを復刻。ローマ字翻訳を併記。イスラム教圏東南アジアの現代史を再構築する上で極めて重要な資料。

※『カラム』の全記事を網羅した『「カラム」雑誌記事データベース』が、地域研データベースとして公開されています。

[http://area.net.cias.kyoto-u.ac.jp/infolib/meta\\_pub/G0000003QALAM](http://area.net.cias.kyoto-u.ac.jp/infolib/meta_pub/G0000003QALAM)



### QALAM No.18-23 1952.1 ~ 1952.6

山本博之 監修

地域研究統合情報センター

2012年6月刊 518頁

マレー語ジャウィ雑誌『カラム』の第18号から23号までを復刻。



### QALAM No.24-29 1952.7 ~ 1952.12

山本博之 監修

地域研究統合情報センター

2012年7月刊 624頁

マレー語ジャウィ雑誌『カラム』の第24号から29号までを復刻。



### QALAM No.30-35 1953.1 ~ 1953.6

山本博之 監修

地域研究統合情報センター

2012年8月刊 662頁

マレー語ジャウィ雑誌『カラム』の第30号から35号までを復刻。



CIAS Discussion Paper Series No.22

### 地域研究アーカイブズ フィールドノート集成 1 ~ 5

高谷好一 著

2012年3月刊 計3,106頁 (但し1巻486頁 2巻452頁 3巻698頁 4巻785頁 5巻685頁)

『世界単位論』などの著者として知られる高谷氏による現地調査記録集成。1973年代から91年代に行ったインドネシア、タイなどの記録を収録。現場で手書きされたフィールドノートを活字化し、ノート中の手書き図や現場での写真とともに取り纏めたもので、当時の現地の様子を窺い知る上での貴重な資料。



CIAS Discussion Paper Series No.23

### 『カラム』の時代Ⅲ マレー・イスラム世界におけるイスラム的社會制度設計

坪井祐司・山本博之 編著

2012年3月刊 47頁

マレー語ジャウィ雑誌『カラム』（1950年から1969年発行）掲載記事から当時の社会状況を読み解く論考集の第3弾。婚姻や家族、教育、行政といった諸方面の制度設計において『カラム』がイスラム教・イスラム法をどのように解釈し、あるいは位置づけようとしたかを考究する5つの論文を掲載。



CIAS Discussion Paper Series No.24

### Right to Education in South Asia: Its Implementation and New Approaches

Kazuyo MINAMIDE・Fumiko OSHIKAWA (南出和余・押川文子著)

2012年3月 64頁

貧困層や農村住民、その他社会的弱者が教育を受ける権利をどのように保証するか。南アジアにおける挑戦を日本の事例も交えて描き出す。



CIAS Discussion Paper Series No.25

### 災害遺産と創造的復興 地域情報学の知見を活用して DVD 付

山本博之・西芳実 編著

2012年3月 239頁

地域研がシアクアラ大学（インドネシア・アチェ）との共同で2011年12月にアチェで開催した同名のシンポジウムにおける報告と質疑応答を、当日使用された報告スライドとともに纏めた報告書。シンポジウムでの議題の一つとなった「災害と社会情報マッピング・システム」の紹介記事等を併録。DVDには映画監督深田晃司氏が撮影・編集した同シンポジウム記録映画が収められている。



CIAS Discussion Paper Series No.26

### 聖なるもののマッピング - 宗教からみた地域像の再構築に向けて -

片岡樹 編

2012年3月 88頁

人々は「聖なるもの」をめぐって実際に何をしているのか。その営為をデータ化・地図化することで新しい地域像が見えてくるのではないかと。「マッピング」という宗教研究において全く新しい手法を導入することにより、まったく新しい宗教像の提示を目指す研究者たちによる共同研究報告書。東南アジアを中心にアフリカ、ヨーロッパに至る各地の研究事例を所収。

## 地域研の今後の企画

### 地域研究コンソーシアム 2012 年度年次集会

日 時：2012 年 11 月 2 日（金）、3 日（土）

場 所：北海道大学

年次集会は、地域研究コンソーシアム（JCAS）の加盟組織がそれぞれの持ち味を持ち寄り、組織の壁を超えた共同研究を推進する機会として、また、共同研究のための出会いの場として年に一度開催されます。ふるってご参加ください。

問い合わせ先 / jcasjimu@jcas.jp

#### シンポジウム

### 「近代アジアをめぐる絵はがきメディア — 帝国・表象・ネットワーク」

日 時：2012 年 11 月 10 日（土）、11 日（日）

場 所：国際日本文化研究センター

主 催 者：科研・挑戦的萌芽研究「朝鮮博覧会と京城の空間形成」（代表：朴美貞）、科研・基盤（B）「エスニック・メディアにおける太平洋戦争と戦後の記憶と記録」（代表：貴志俊彦）、京都大学 CIAS 共同利用・共同研究萌芽研究ユニット「メディアとテクノロジーからみる地域間情報」

共同主催：NIHU 東洋文庫拠点現代中国研究資料室、東洋文庫超域アジア研究部門現代中国研究班国際関係・文化グループ

開催案内

## 谷川竜一助教が着任しました

私の出身は建築学です。建造物は過去の人々の社会的営為や生活様式が形となったものですが、単にそれだけにとどまらなると私は考えています。例えば誰も家を建てる時、その使い方を1年や2年のスパンでは考えない。家族が増えたとき、あるいは自分が年老いたときなど、数十年のスパンで家の使い道を考えるわけで、それが宗教的な建造物や、あるいは企業や国家が作る建造物であれば、さらに先の将来のことを考えて造っているはず。つまり、私たちは建造物を造るとき、そこに私たちの過去の営為や生活様式に加え、未来像を織り込んで造っているのではないのでしょうか。

そうした視点で、私は（1）日本が近現代にアジアとどのような関係を築いてきたのか—特に帝国として日本がアジアに

侵略・進出する際に建造物はどのように利用されたり、「貢献」したりしてきたのかということをはっきりとすることで、植民地支配などの歴史的な問題の解明へ寄与すること、（2）アジアの都市に残されている近現代の建造物の全体像の可能な限りの把握とその利用に向

けたプラットフォームの構築、（3）記録や記憶を用いた地域振興や文化への貢献など—特に博物館建築や建造物のメディア的側面の利用のされ方を明らかにすること、をテーマにして研究を行っています。今後地域研の様々な活動の中で、新たな手法や技術を学びながら、情報学と地域研究の深化に少しでも貢献できればと思っています。

（谷川 竜一）



改修中のソウル駅（1925年竣工）のドームの上で

## 地域研の動き

### 谷川助教が着任しました

4月1日、谷川竜一助教が地域研・地域  
 関連研究部門に着任しました。アジア近代  
 建築に関する研究実績を多数有し、近代建  
 築データベース構築を進める谷川助教の加  
 入は、地域研究および地域情報学に新たな  
 展開の方向性を与えるものです。(14ペー  
 ジに関連記事)

### アチェ・シアクアラ大学の研究者来日

インドネシアのアチェにあるシアク  
 アラ大学津波防災研究センターと地域  
 研の合同ワークショップ「災害後社会  
 の再建と情報管理」が、7月2日(月)  
 に地域研で開催されました。アチェか  
 らの参加者の方々は、昨年末に地域研  
 が同センターとMOUを締結した際に参  
 加・協力してくださった方々です。ワー  
 クショップの前後に、関西一円の災害の記憶のための施設や地域振興施設  
 を訪問しました。特に京都では、古い社寺が点としてではなく、周辺地域  
 の環境と合わせて面として、いかに利活用されているかを見学すると同時に、  
 マングミュージアムなどの新しい文化施設なども視察しました。



ワークショップの後にシアクアラ大学から報  
 告書の贈呈を受ける林センター長

### 山口研究員が日本地理学会賞を受賞

地域研の特任研究員である山口哲由氏が、2011年度の日本地理学会賞(優秀論文  
 部門)を受賞しました。受賞の対象となったのは地理学評論誌第84巻3号に掲載さ  
 れた論文「移動牧畜が放牧地に及ぼす負荷の分布状況の推定—中国雲南省北西部のチ  
 ベット族村落の事例—」です。授賞式は2012年3月28日の日本地理学会2012年春  
 季学術大会にておこなわれました。



山地に生態的な基盤を置くヤク牧畜は、保全政策と  
 の狭間で岐路に立たされている(フィールドから)。

## The Last Photograph



This photo was taken at the Lodi Gardens, a park known to be a green lung of Delhi, India. Inside the park is located Indian preserved heritage of tombs from the 15<sup>th</sup> and 16<sup>th</sup> century. These monumental tombs defy Islam principles; rouse inquiries about the origins of Mughal spatial conceptions; and inspired travelers to incorporate mausoleums to European landscape design, especially in the 18<sup>th</sup> century Britain.

The *karensui* garden of the photo contrasts to the exuberance of the surrounding greenery and built heritage, stimulating a consideration about India-Japan exchanges.

From ancient times Buddhism has linked together the two regions, followed by trade relations that culminated - in the context of the Cold War - with the establishment of Japan-India diplomatic relationship as late as the 1950s period. In 1958 a series of Japanese gardens were built and designed in Delhi by the landscape architect Mori Kanosuke. Moreover, a Japanese team intervened in the Lodi Gardens landscape transformation during the 1950s period. A further investigation on the theme would be of interest for the discussion of expertise mobility and globalization.

(FLORES URUSHIMA Andrea (CIAS, Research Fellow)

### 表紙写真について

街道沿いにずらりと並んだナン(平形パン)を売る屋台(ウズベキスタン)。

京都大学地域研究統合情報センター  
 ニュースレター No.11

●発行日 2012年9月28日

●発行者  
 京都大学地域研究統合情報センター  
 〒606-8501  
 京都市左京区吉田下阿達町46  
 Tel: 075-753-9603  
 Fax: 075-753-9602  
<http://www.cias.kyoto-u.ac.jp/>

●編集責任 星川圭介・谷川竜一

●編集協力・表紙デザイン 川島淳子